

【表紙】

湘南医療大学 ティーチング・ポートフォリオ

大学名 湘南医療大学

所 属 保健医療学部 看護学科

名 前 田中秀子

作成日 2024年9月

目次

1.	教育の責任	p	2
2.	私の理念・目的	p	2
1)	私の理念		
2)	理念持つに至った背景		
3.	教育の方法・戦略	p	3
4.	学習成果	p	4
5.	改善のための努力	p	4
6.	今後の目標	p	5

## 1. 教育の責任

保健医療学部の教育目的は、生命の尊厳を基に、科学的及び文化的専門知識・技術を身につけ、保健・医療・福祉教育を総合的に捉えられる看護師・保健師を養成し、地域社会はもとより、国際社会の発展に貢献できる人間を養成することを目的としている。そのためには、人間を理解し、人としての倫理観を備え、人々の健康を守れること。また人々の健康課題に対処でき、かつ関係職者との連携や協働ができる人材の養成ができるような教育を目指していて、そのような人材を社会に輩出できるような教育の責務を負っている。当然、国家試験に合格できる知識や技術が身に着けられるような教育を行う。

担当科目:成人看護学、成人看護方法論Ⅰ、ナーシングプロセスⅡ、看護研究、統合実習、慢性期看護実習、病態学、ナーシングスキルⅠ・Ⅱ、ヘルスアセスメント学Ⅰ、Ⅲ、生涯発達論、プロフェッショナル論Ⅰ

## 2. 私の理念・目的

### 1) 私の理念

教員生活30年となり、初めて受けもった学生は看護管理者になっている人もいる。看護学校の教員から教員生活が始まったが、このころは3年間でしかも、実習時間がカリキュラムの大半の時間を占める内容であり、今のようなアクティブラーニングのような授業形態はなくて、座学では一方的な授業がほとんどであった。しかし、学内の演習では、今の学生よりも自分たちで練習したり実習に向けて実践的な内容が多く、卒業後もすぐに現場で働けるようなカリキュラムとしてもっと将来を見据えた人たちが多かったように思う。しかし、今のようにエビデンスを出さないと診療報酬がつかない医療社会で役に立つためには根拠を持ったケアができる人材の育成は欠かせない。30年前とは病気の種類や治療も大きく変わり、最近では認定看護師や専門看護師、特定看護師など医師のタスクシフトが開始され、一部の医療行為も看護職が行うことを認められるような社会に代わってきていることから看護職に求められる役割は大きく変化してきている。それに対して教員もいち早く、時代の流れに追いついて、新しいことを取り入れた教育をしていく必要を感じている。

### 2) 理念をもつに至った背景

私は、大学教育に携わってはや17年であるが、その前は日本看護協会でもアドバンスの教育を行っていた。皮膚排泄ケア看護認定看護師の教育に携わってきた。1997年から認定看護師の教育が始まったが、現在は統合される分野もでてきており21分野あったものが19分野に整理された。認定看護師教育は最初は救急看護認定看護師と皮膚排泄ケア認定看護師の2分野だけで始まり、その一つの分野の教員として赴任した。そし

て、最初は認定審査の制度にかかわる認定部での仕事と認定看護師を教育する学校の教員との両方を行っていた。しかし制度と教育の両方をするには、時間的にも厳しいものがあった。日本で初めての教育であり、お手本がないことから、一番悩んだのは、修了した人たちが現場に戻って役割を果たせるのか？また周りの人たちから理解されるのか？ということであった。自分自身も 1980 年代にアメリカで教育を受けてきて、日本にはない看護職の働き方をみて、なんと自立していて、ケアの方法も日本よりはるかに進んでおり、先進国であることを実感した。帰国した時には常に前例がないということで、いろいろな新しいことをするにはハードルが高かったことを記憶している。このようなことを経験したことから、日本看護協会より専門教育の教員としてキャリアを積んではどうかとお誘いをいただいた。大変ではあったが、この認定制度を作る段階からかかわることができ、大変勉強になった。もちろんアメリカの教育の内容や方法は、日本で認定看護師の教育の手本となったのであるが、アメリカでは制度を作るのが教育よりも後追いになったことから、終了した人たちのその後のキャリアを積むための準備に時間がかかった。資格等については日本では制度から作ったことでしっかりとしたものであったことは言うまでもない。これまで現場ではなかった制度であり、また私の専門とする分野では医師とコラボレーションしないといけない内容が多く、特に創傷管理においては医師からの反対の意見もあつたりして、社会に広めていく大変さをいやというほど味わった。これはすでに 20 年以上前のことであるが、コンセンサスを得るには本当に大変な時代であった。そして最初の数年は輩出した修了生が看護職のトップである部長にも理解されないこともあり、何ができる人たちなの？という声が聞かれたりして、とにかく地道に努力していくことしかできない、そんな時代であった。そんな経験を通して、常に新しい挑戦をしていく必要性を感じている。

### 3. 教育の方法・戦略

臨床現場との乖離をできるだけなくして、実際に行われている方法を教育にも取り入れていく必要を感じている。私は昨年まで大学教員をしながら月 2 回は臨床に出向いて、褥瘡回診を行っていた。それ以外にコンサルテーションがあればストーマの患者や皮膚障害の患者様を見ることもあった。新しいケアの方法やケア用品、検査の介助方法などできるだけ見てきたことを学生に伝えるようにしてきた。百聞は一見にしかずであり、見たものを動画で写したり、(患者本人の許可のもと)写真に撮ったりして教育に還元させてきた。そして学会の(日本褥瘡学会)ガイドライン作成にも加わったのでこれを紹介したり、最先端の情報をできるだけ伝えるようにしてきた。医療は日進月歩で 2 年前におこなっていたケア方法が変更になったり、特に用品の開発は覚えられないくらい早く新しい用品に変更されてきている。自己研鑽を積んで教育に活かしていく必要がある。しかし、教育は普遍的なことも教える必要があることから、看護の歴史や理論などを理解してこれまで発展してきた経緯を自分自身もわかって教育していく必要がある。さらには、我々の領域では技術の開発などもどんどん進んでおり、最近自分自身もエコーをもちいた診断法など始めている。聴診器がエコーに

代わる時代もすぐそこまで来ている。当大学のカリキュラムはプロフェッショナル論があるが、専門看護師や認定看護師、診療看護師の資格を持つ教員も多いことからよその大学にはない特徴を持っていて、看護の面白さを伝えられる教員が多いと感じている。

#### 4. 学習成果

1) 自分は創傷ケアをメインに活動をしている。授業は専門のところを教えるシラバスになっているので、できるだけ新しい情報を提供するようにしている。ただし、前述したように国家試験に合格しなければ学生のゴールは達成できないので、過去の問題を常に意識しながら授業を進めている。下記は授業に対する学生の評価である。科目を複数でオムニバスで担当しているので、各人の評価ではないので、一概には言えないが、臨床看護領域は事例をたくさん持っている教員が多いことから概ねよい評価であると言える。学生の 評価を以下に示す。

1. 成人看護方法論Ⅱ—総合評価 4. 39 (5. 0点満点)
2. 成人看護方法論Ⅰ—総合評価 4. 45 (5. 0点満点)
3. 成人看護学—総合評価 4. 44 (5. 0点満点)
4. ナーシングスキルⅠ—総合評価 4. 85 (5. 0点満点)
5. 成人看護学実習Ⅰ— 総合評価 4. 70 (5. 0点満点)
6. 成人看護学実習Ⅱ—総合評価 4. 72 (5. 0点満点)
7. 病態学Ⅲ—総合評価 3. 93 (5. 0点満点)
8. 生涯発達論—総合評価 4. 48 (5. 0点満点)

以上である。

#### 2) 成果:論文や受賞

- 論文—1. 排尿自立指導料が下部尿路症状及び排尿動作に及ぼす有効性の検証  
2. WOC 領域における専門外来の現状と将来展望  
3. 車いす利用高齢者に対する体圧センサーシートを用いた座圧分布チェック  
リストの開発

#### 5. 改善のための努力

- <1> アクティブラーニングの方法を取り入れる。例えば、「ストーマのケア」の単元ではストーマ装具を実際に装着させ、3 日間日常生活を送ってもらう。患者体験をしてそれをレポートしてもらう。
- <2> 「創傷ケア」のところでは、実際にベッド上での体圧を測定して、体位によって変わることを体験してもらう。体験学習
- <3> 褥瘡の発生の原因要因を知る  
体位の変換の仕方、必要物品の確認(ずれが起きないような手袋)、背抜きの方法、マットレスカバーの材質の確認など実際に見てもらう(観察)

#### 6. 今後の目標

長期目標: 学生がディプロマポリシーを達成できるように個々の学生の到達度を確認して、留年や卒業延期ができるだけでないような授業の在り方について責任を持つ。

短期目標: 毎回の授業の終了時もしくは次回の授業の開始時に内容が理解できたかを確認するための小テストを行う。定期的に授業内容の理解ができているかの確認を 15 回の授業であれば途

中 3 回くらいの単元で確認をおこなう。9月授業開始から始める。

最終評価は学期末に行う。

#### 【添付資料】

論文— 1. タイトル「車いす利用高齢者に対する体圧センサーシートを用いた座圧分布チェックリストの開発」

日本創傷・オストミー・失禁管理学会誌 5巻4号 2022 年

2. タイトル「WOC 領域における専門外来の現状と将来展望」

日本創傷・オストミー・失禁管理学会誌 26巻4号 2023 年

3. タイトル「ストーマケアに関わる医療者の心構え」

ストーマケアガイドブック p6～8 2024 年

#### 研究進行中

1. タイトル「乳がん皮膚自壊創管理に求められるドレッシング材の特徴に関する質的研究」 審査承認番号 197

2. 座圧測定併用シーティングが車椅子利用高齢者の圧再分配および日常生活に及ぼす影響: 多施設コホート研究